アッシー教会における「聖なる芸術（アール・サクレ）」論争
― ジェルメーヌ・リシエ作《十字架上のキリスト》の撤去をめぐるスキャンダル ―

宮川由衣（西南学院大学）

1950 年にフランス東部、スイスとの国境に近いアッシーの高台にノートル＝ダム＝ド＝トゥト＝グラース教会（以下アッシー教会）が献堂された。その装飾にはレジェやマティスら 20 名以上の芸術家が参加した。アッシー教会は、教会芸術のモダニズム化を牽引したマリー＝アラン・クチュリエ神父（1897-1954）の「聖なる芸術（アール・サクレ）」運動の成果を問う最初の試みであった。本運動は、マティスのヴァンス・ロザリオ礼拝堂やル・コルビュジエのロンシャン・ノートル＝ダム＝デュ＝オー礼拝堂を実現へと導いたことで、特に建築史の分野で評価されてきた。一方、その嚆矢となったアッシー教会の美術史的意義は十分に議論されていない。本発表では、アッシー教会のキリスト像をめぐる論争に光を当て、その歴史的意義を再考する。

アッシー教会ではクチュリエ神父の指揮のもと、宗教的信条や政治的イデオロギーに関係なく、非キリスト教徒の芸術家にも教会の装飾が依頼された点が注目される。クチュリエ神父は、無神論者であった女性彫刻家ジェルメーヌ・リシエ（1902-59）にキリスト像の制作を依頼した。教会の主祭壇中央に置かれたブロンズの彫刻《十字架上のキリスト》（以下キリスト像）は、肉体や衣の細部表現を簡略化した抽象的なキリスト像であった。献堂後まもなく、この像は一部のカトリック保守主義者による激しい非難に晒され、撤去を命じられた。撤去のきっかけとなったのは、アッシー教会についての講演会で配られた 1 枚のビラであった。「神をからかうものではない！」という見出しをつけたビラでは、リシエのキリスト像が、こうあって欲しいという「サン＝シュルピス」風のキリスト像の写真と並べられて糾弾された。こうして口火を切った「聖なる芸術」論争は、ヴァチカンをも巻き込む聖像論争へと発展した。

アッシー教会をめぐっては、ルービンによる包括的研究(1961)にはじまり、オレンダフ(2008)や後藤新治(2018)の先行研究がある。そこではアッシー教会についての当時の言説から、リシエのキリスト像が非難の的となり、撤去された経緯や論争の内実が明らかにされた一方で、本作の造形については十分に論じられていない。本発表では新たに、これまで宗教的主題の作品を制作したことのなかったリシエが、教会の磔刑像というテーマにどのように取り組んだのかに着目し、彫刻家自身の言葉や同時期の作品について考察する。それにより、従来の人体像としてのキリストのイメージを解体し、自然との関わりから新たなキリスト像を造形化することを目指した彫刻家の意図が明らかになるだろう。その上で、「聖なる芸術論争」において争点となった問題、すなわち「芸術家はキリストを自身の形式的な概念に置き換える権利があるのか」という問いに対し、ヴァチカンがこれを否定したことに注目し、本論争の歴史的意義を再考する。